

先日、倫理法人会主催のある会合で分科会が行なわれました。テーマの一つが「倫理法人会に入つての体験」でした。参加者の年齢は三十代から七十代まで幅広いものの、倫理法人会の入会暦は比較的浅い方が中心でした。

レポートの中から幾つかを紹介しましょう。まずは、実践に伴う企業の業績の変化に関わるものから。

「今行なっている実践は、墓参、トイレ清掃、早朝三時三十分の起床、毎朝の活力朝礼。その結果、専務（私）は変わったと言われるようになった（内外共に）。社員の働く意識が明確になった。夫婦喧嘩が全くなり家庭が明るくなった。他のガソリンスタンドがドンドン閉鎖しているのに、我が社は現在黒字で運営できている」

「五十歳で離婚をし、五十六歳で再婚をしたが、夫婦仲良くしていると妻の連れ子である二人の息子と実の親子以上に仲良くできている。会社の経営も、家庭がうまくいくと共によくなってきた。認知症の妻の母親とも同居してお世話をさせて頂いていたら、その二人の息子が『お父さん、何でも手伝うよ』と言ってくれ、家庭が明るくなってきた」

「活力朝礼を導入することは、時間のロスになると迷っていたが、実際にやってみると、仕事がかどり、朝礼時間を簡単にカバーでき、さらに効率が良くなった」

次に、経営者の心の変化や家庭内の変化についての感想です。

「倒産を経験し、色々あった。義理で入会したが、入会後は温かい心で見守ってく

今、倫理法人会は必要か？



え・牧えみこ

れている仲間があり、再起に自信がついた」
 「倫理を学ぶことで、ストレスを解消できるようにになった。倫理に入っていないければ、俺は自殺したよ」
 「妻が作る食事に、『おいしいね』と言えるようになった」
 「父の臨終の時に『父さん子どもでよかった！』と言えた」
 不確実性の時代にあつて、生き生きとしたチャレンジができるかどうかについて、脳科学者の茂木健一郎氏は「安全基地」があるかどうかと言います。たとえば、子どもの頃に先のこととは分からなくても新しいことに興味津々で挑戦できたのは、失敗して傷ついたとしても自分を温かく見守ってくれるものがあつたからです。それが父親であり、母親であつて、その安心感があるからこそ、子ども時代は脳をいつもポジティブに保つことができました。

この安心感のもとを、「安全基地」といい、「安全基地」を持ってないと現実から逃げ出したいと思う状態に陥るといいます。先のレポートの報告からも、倫理法人会での学びと実践が、自らの内にそれぞれの「安全基地」を作る結果となり、それが業績や積極的な心へと繋がっていることが伺えます。

そして、始めに紹介した分科会のもう一つのテーマが、「今、倫理法人会は必要か？」でした。その報告にあつた「道徳心のなくなった現在の日本に大変憂いを感じている。以前の日本の精神性を取り戻すことが大切だから絶対に必要」との意見も併せ、先行き不安な時代だからこそ、ますます倫理法人会活動に使命と誇りを持って進んでいきたいものです。